ヘノ格の名詞と名詞とのくみあわせ
－かざられが動作・状態性の名詞の場合－
A Study of the Combination of a Noun and a Noun with the Case-marker "Eno" : Modifiee as an Active or Stative Noun

大　平　真紀子
OOHIRA, Makiko

1．はじめに

名詞の形態論的な形としての格の体系の中には、連用格と呼ばれる「ガ・ヲ・ニ・ヘ・デ・ト・カラ・マデ」が存在する。それに対して連体格は「ノ」、さらに、「ノ」に「ヘ・デ・ト・カラ・マデ」がついた複合連体格「ヘノ・デノ・トノ・カラノ・マデノ」が存在する。そして複合連体格は、ノ格では担うことのできない領域をカバーしながら存在している。それは、連用格の体系とも異なり、独自の体系をなしていると思われる。

この複合連体格を連語論的観点から研究したものに関して、連用格における記述は詳しくそのくみあわせのタイプを網羅的に示しているが、連体格に関しては、一部の研究を除き、ほとんどされてきていない。これまでこの複合連体格が取り上げられてこなかった背景の一つには、これらの形式が「ヘ＋ノ」、「デ＋ノ」などというように、助詞の足し算で解決する問題だという捉え方があると思われる。しかし、連用格が「ガ・ヲ・ニ・ヘ・デ・ト・カラ・マデ」で、８つあるのに対して、複合連体格は「ヘノ・デノ・トノ・カラノ・マデノ」で、５つであり、これだけを見ても、連用格と連体格に違いがある。

さらに連用格と連体格は、どんな場合でも置き換えられるわけではない。たとえば「東京へ行く」が「東京への行き」にはなりにくい。しかし、「東京へ出張する」を「東京への出張」とすることは容易であろう。かざられ名詞が漢語サ変動詞の語幹である場合、連用格と連体格の置き換えがしやすい。

しかし、複合連体格にはニノ格がないため、連用格のニ格がヘノ格で表されることになる。たとえば「息子に送金する」は「息子への送金」と、連用のニ格が、複合連体格のヘノ格で表される。また、「彼女を信頼する」が「彼女への信頼」となるように、ヲ格で表されたものがヘノ格で表現されることさえある。しかし、ニ格、ヲ格のすべての用法がヘノ格で表されるわけでもない。結論を先取りするが、ニ格における、かざり名詞があい手的であるもの、ヲ格における、かざられ名詞が心理活動であるものが、ヘノ格で表される。

これらのことを考えると、確かに、「へ」と「へノ」の、つまり連用格と連体格は、対応が明らかな部分もあるが、しかしやはり、連用を連体に置き換えるだけでは、あるいは「へ＋ノ」だけでは説明できない部分が存在する。従って、複合連体格はその中に独自の体系を形作っていると考えるべきであり、それぞれの体系の中での意味、他の格との関係を調べていかなければならない。日本語において連体は、書き言葉を中心として、連用とは異なる発展をしており、連体独自の機能に応じた体系を発達させている。これを明らかにするためにまず、へノ格でつながれた名詞と名詞を一つの連語と考え、その連語がどのような意味的タイプに分類されるのかを明らかにしていきたい。

連語論とは構文論の一種であり、単語の語彙的な意味がどのようなむすびつき方をしているかを明らかにするものである。同時に、文の文法的な構造、つまり文をくみたてている要素の間のむすびつき方を研究する。連語論の目標は、一つ一つの連語に備わっている具体的な記述をするというわけではなく、一つ一つの連語をくみたてている単語の語彙的な意味は異なっても、単語のカテゴリカルな意味、さらにむすびつきの性格は一般的であるという事実に基づいて、単語の間のむすびつきを一般化していくところにある。これは、無限に多様な連語を構造的なタイプに整理することである。

ある一つのむすびつきは、別のいくつかのむすびつきと対立しながら、補い合いながら、パラディグマティックな関係をとりむすんでいて、一つの体系をなしている。つまり、連語論的なむすびつきの体系の中で、一つ一つの具体的な連語論的なむすびつきは一般化され、カテゴリーとして存在している。従って、連語論的なむすびつきをカテゴリーに一般化するということは、連語論的なむすびつきの体系を捉えるということを意味している。

複合連体格においてもっとも複雑なのが「へノ」格であろう。使用頻度も高く、また、上述したように、へノ格は、連用格でいうヲ格やニ格の役割を担っている場合もあり、複雑である。よって、ここから分析を始めようと思う。

ところで、連用と連体が置き換えられない例は他にもある。それが、「東京への道」のような、かざられが動作・状態的ではない名詞らしい名詞の場合だ。この場合、「東京へ向かう道／東京へ続く道／東京へ伸びる道」といった意味合いになるが、連用格で表現できない。それは、かざられ名詞が名詞らしい名詞に起因すると思われる。そして、かざられが動作・状態的な名詞の場合とは、異なる意味的タイプを持つ。一方、かざられが動作･状態性の名詞である場合は、「東京へ出張する」が「東京への出張」という移行関係がわかりやすい。本稿ではまずかざられが動作・状態的な名詞の場合について述べる。「東京への道」のようなかざられが名詞らしい名詞である場合は、稿を別にして述べたいと思う。

用例に挙げられているへノ格の中には、「～へ向けての」や「～に対する」などの後置詞と置き換えが可能なものが存在する。こういった後置詞と複合連体格がどのような関係であるかということも重要なことであるが、これについても稿を変えて論じたいと思う。

2．先行研究

ヘノ格の名詞と名詞のくみあわせに関する先行研究としては、彭広陸（1998）「ヘノ格の名詞と名詞のくみあわせ」が挙げられる。彭（1998）ではヘノ格を取り上げ、その前後の名詞のカテゴリカルな意味によって分類している。

次に彭の分類とその用例を載せる。用例は彭（1998）の用いたものの一部である。

状況規定的なむすびつき
- 空間規定的なむすびつき
  - ゆくさきのむすびつき…地方へのお出かけ、日本への亡命
  - 方向のむすびつき…左右への歩行、前方向への動き
  - くっつけのむすびつき…日本人患者への移植、同機への搭乗
  - 出現のありかのむすびつき…店頭への返り咲き、大雪による国道への雪崩事故
  - 存在のありかのむすびつき…わが国への定住、天安門広場への人民解放軍進駐
- 目的規定的なむすびつき
  - 目的のむすびつき…アジアの緊張緩和への動き、30年ぶりの中ソ正常化実現への動き
  - 目標のむすびつき…平和国家への努力、「中東平和」への調整

結果規定的なむすびつき…24時間休みなく動き続ける国際金融都市TOKYOへの変化、「実力主義」への変換

相手規定的なむすびつき
- やりもらいの相手のむすびつき…家族への送金、日本輸出入銀行への配分
- 言語活動の相手のむすびつき…遺族への取材、私たちへの質問
- 態度の相手のむすびつき…市民への対応、福田元首相の後継へのバトンタッチ
- 感情の相手のむすびつき…植源の嫁への嫉妬、お姉さんへの憧れ

対象規定的なむすびつき
- 社会的活動の対象のむすびつき…共産主義青年団への入団、全国大会への出場
- 態度的活動の対象のむすびつき…自己への批判、高齢や新庁舎への批判
- 心理状態の対象のむすびつき…『社会党』名への郷愁、過ぎ去った青春へのノスタルジア

主体規定的なむすびつき…市民への被害、大学、大学院への社会人受け入れ

内容規定的なむすびつき…大会成功への大号令、戦争への危機

まず彭（1998）では、「地方へのお出かけ」「日本への亡命」を初めとする空間規定的なむすびつきと目的規定的なむすびつきを状況規定的なむすびつきとしているが、「地方への」「日本への」という

のは状況語ではなく対象語である。つまりヘノ格の名詞と名詞とのくみあわせでは基本的に全て対象的なむすびつきになる。

また、彭ではむすびつきの名前のつけ方がかざりかかざられかを中心としたものになっているため、本稿ではかざりとかざられの両方のカテゴリカルな意味を加味した名付けにするとともに、分類の精密化を試みたいと思う。

3. 方向性のむすびつき

3節では、方向性のむすびつきについて述べる。かざりが具体的な場所でかざられが具体的動作を表すものが3.1、3.2節、3.3、3.4、3.5節ではかざり名詞の抽象化が抽象化したもので、それによってかざられにくる名詞の語彙的意味のタイプも異なる。

まずかざりが具体的場所でかざられが移動動作のくみあわせという、より具体的な語彙的意味を持つくみあわせのタイプが初めにくる。そして、かざられの移動動作が他動的動作のものになると、うつしかえ場所とうつしかえ動作のむすびつきとなる。かざり名詞が抽象化し、抽象的な場所名詞や団体となり、かざられが参加動作となったとき、参加先と参加動作のむすびつきとなる。さらに、かざりが新しい状態、かざられが変化を表す動作をとると状態変化のむすびつきとなる。かざりが目標・ゴールとなり、かざられが達成のための活動となる場合、目標のむすびつきとなる。

これらのむすびつきは連用でいうところのへ格やニ格の領域にあたるものである。しかし目標のむすびつきである「最終ステップへの準備」などは、連用で表すとするならば「最終ステップ ┤へ向けて／のために┤ 準備する」など、単純に連用格で表現できない。このむすびつきは、連体格の中で独自に発展していった形であろうと思われる。

3.1. ゆくさきと移動動作のむすびつき

かざりが具体的場所名詞でかざられが移動動作である場合、そのくみあわせはゆくさきと移動動作のむすびつきになる。かざり名詞には「台北」「備中」などの具体的な場所名詞がき、かざられ名詞には「転任」「脱出」などの移動動作を表す名詞がくる。

（1）ここも逃げ出す決心をした彼は、ようやく傭えた小舟で、まず、ジェノヴァ領のキオス島への脱出に成功する。（コンスタンティノープルの陥落）

（2）光秀は自分の十三人の隊将をあつめて備中への遠征を告げ、その支度を命じたあと、（国盗り物語）

（3）この遁走を全軍団に告げたわけではなく、わずかに後を追う馬廻りの人数をひきいたまま闇にまぎれて脱出し、浅井領ではない琵琶湖西岸の山岳地帯を縫って京都への遁走を開始した。（国

盗り物語）

（4）岩壁に密着した氷が北鎌尾根への下山をこばんでいるようであった。（孤高の人）

（5）それでガダルカナル島ヘンダーソン基地への帰還が仲間より数日おくれたが、帰ってみると二機の「ベティ」撃墜の殊勲者としてトーマス・ランフィヤー・ジュニアとレックス・バーバーの二人の名が、日本流に言えばすでに武勲上聞に達していた。（山本五十六）

（6）少し前に、私の社でそれを原料に使用したいからと、内地への移入を申請いたしました（人民は弱し　官吏は強し）

（7）航海長池田貞枝中佐は、パラオへの入港前に、模型を作ったりして直角に曲る個所の通過を研究し、入港時には成功したが、あわただしい出港時にはかなりの不安があった。（戦艦武蔵）

（8）しかし梅雨があけるのは七月なかば頃だろう、ということで、北海道への出発は七月十八日ときめてあった。（冬の旅）

（9）しかし結局、上司として慎重な師も、我々の（特に同僚、ガルペの）熱意にまけて日本への密航を遂に許して下さいました。（沈黙）

（10）「ひとがみてるわ」と彼女はひどくコケティッシュにみえる抗議の微笑をうかべていい、それにぼくがさらに抗議しようとすると、彼女は両手をのばしてぼくのコートのはずれていたボタンをかけてくれながら、一日中太陽の航跡がみえる島への旅行のことを口にした。（聖少女）

複合連体格においてそのかざられ名詞の主体を表す場合、（11）の「父の台北への転任」ように、ノ格を用いて連語を広げることができる。さらに、主語は（13´）のように、かざられを臨時的な複合名詞として用いることもできる。このように、主語を臨時的な複合語にしてかざられにおく現象は、どのくみあわせにおいても出現する可能性がある。

（11）鮎太は一年生の間だけ家から通学したが、二年になった春、父の台北への転任と同時に寄宿へ入った。（あすなろ物語）

（12）あとは北方の美濃への進攻だ（国盗り物語）

（13）そして現在の戦況、米軍のリンガエン湾への上陸も、徐々に激しくなってゆく本土への空襲も、彼自身の毎日の工場通いも、やがては同じように子供だましの安逸なものとして記憶されるようになるのかも知れない。（楡家の人びと）

（13´）リンガエン湾への米軍上陸

次の４つの例は、かざられ名詞が、場所をさすが具体的に地点を示せるものではない例である。また、このむすびつき全体を通してそうであるが、（17）のように、「マルケサス群島からフィジー諸島への航海」といったように、「～カラ～ヘノ」と、カラ格で起点を表した上で「航海」を修飾する場

合も見られる。

(14) 水際の対空戦闘と奥地への困難な行軍で、ルソン島に駐屯当時から不安を感じていた、以前の病気が昂じたのである。(野火)
(15) 次の日から又、故の竜城の道に循って、南方への退行が始まる。(李陵)
(16) 敦賀は一乗谷とはちがい、海岸に面して万一の場合海上への脱出が可能であり、それに陸上交通の要衝でもあり、義秋が諸国の大名に使いをやったり使いを受けたりするのに便利がよい。(国盗り物語)
(17) 私は彼の指揮下に一艇員として加わり、マルケサス群島からフィジー諸島への航海を夢にまで見ていただけに、残念でならない。(風に吹かれて)

かざられが複合名詞になる場合は、興味深い現象がいくつか見られる。そのうちの一つが、かざりは普通かざられ名詞全体を修飾するが、かざられの単語の一部を修飾している例である。次の例の「呉工廠」「アメリカ」が修飾しているのがそれぞれ「転任」「逃亡」であることは明らかであるが、これらは「転任命令」「逃亡準備」という単語の一部でしかない。普通はかざられが複合名詞になっても「京都への慰安旅行を計画する」などのように、複合名詞の後部、つまり複合名詞全体を修飾する点で以下のものと異なる。ヘノ格の連語は「転任命令」などの臨時的な複合名詞を導きやすいが、ヘノ格と臨時的な複合名詞が重なることでできる特異な例である。

(18) 艦政本部から梶原造船監督官に呉工廠への転任命令が出たのは、三月上旬であった。(戦艦武蔵)
(19) アメリカへの逃亡準備のひとつとしてぼくは数学関係の本をのぞいて蔵書をすっかり売り払ってしまったので、部屋はガイコツの模型じみた空虚な貧弱さをむきだしていた。(聖少女)

単純に一方向に進むのではなく、移動の範囲を表す例も見られる。かざりは場所名詞であるが、かざられが「往復」「行き来」など、往復を表す名詞になる。別の見方をすれば、「往復」の「往」が、ヘノ格の使用を可能にしていると言えるかもしれない。この種の連語を連用格で表そうとすると、「主戦場を往復する」と、ヲ格になる。

(20) 峻一の判断によると、どうもこの島の近くを通過する敵の機動部隊は、ウエーク島を一種の演習地と見なし、彼らの主戦場への往復に飛行機を飛ばしてくるもののようであった。(楡家の人びと)

かざりが抽象名詞となることで、上記のものとは異なる例である。

（21）中間だとするならば、未知なるものへの逃避より、既知なるものへの退却の方がより安全のように思われた。（孤高の人）

3.2　うつしかえ場所とうつしかえ動作のむすびつき

かざりが具体的場所名詞であることは3.1と同じであるが、かざられが他動的動作になるとこのむすびつきになる。かざり名詞には「倉庫」「ここ」などの場所名詞（代名詞）が、かざられ名詞には「搬入、召喚」などの、他動的な動作を表す名詞がくる。また、前節のゆくさきと移動動作のむすびつきに比べ、この種のむすびつきは数が少ない。

（22）保税倉庫への搬入は輸入とみとめる。（人民は弱し　官吏は強し）

（23）「しかるのちに、私をお調べになるのが順序でしょう。それを怠って、私の家宅捜索をなさった。ここへの召喚の件も報道された。（人民は弱し　官吏は強し）

前節でも少し触れた、かざられが複合名詞である場合であるが、このむすびつきの場合にも興味深い例が見られる。かざられが「援軍派遣」という臨時的な複合語なのであるが、これは「援軍を派遣する」という目的語を含んだ臨時的な複合語である。上述したかざられが主語を含んだ臨時的な複合名詞（（13´）リンガエン湾への米軍上陸）と、目的語を含んだ臨時的な複合名詞（24）、さらに、単純な規定語を含んだ場合（京都への慰安旅行を計画する）と、複合名詞をかざられとする場合には三つのケースがある。

（24）それでも、大使は皇帝に、ヴェネツィア本国に居留区の態度決定を報告するためにおくる使者に、コンスタンティノープルへの援軍派遣をあらためて要請させることを約束した。（コンスタンティノープルの陥落）

3.3　参加先と参加動作のむすびつき

かざりが場所名詞や参加される団体で、かざられが参加に関わる動作名詞の場合、参加先と参加のむすびつきになる。ここでは、（25）のように、実際の戦線や戦場への移動を伴う場合もあるが、（26）のように、実際の行為ではなく、かざり名詞である団体「化学工業研究会」に加入する、という例も見られる。これは、実際の移動を伴うものではなく、新しい団体に参加することで、身分や立場が変化したことを表す。かざられ名詞が移動動作を伴わず、抽象化された場合、くみあわせのタイプがこれまでのタイプとは異なってくる。

さらに「田沼屋敷への出入り」「編集局への出入」などでは、実際の出入りする行動をさすのではなく、「出入りすることができる」あるいは「出入りする許可を得ている」といった意味合いになる。

(25) アメリカの世論は、欧洲への参戦を好まず、議会には孤立主義の傾向が強かったが、ルーズベルト大統領としては、ヒットラーの勝利と狂態とを、あのまま座視するわけには行かなかったであろう。(山本五十六)

(26) 化学工業研究会への参加を呼びかけ、勧誘してまわった業者たちのことを考えたのだ。(人民は弱し　官吏は強し)

(27) オランダの提案による日本の連盟への加入を承認する。(人民は弱し　官吏は強し)

(28)「なかなか成績もよかったんですが、残念でした。あの公立へ入ったのでは彼の志望している大学への進学はちょっと無理かも知れませんね」(エディプスの恋人)

(29) 副社長の小池さん、それに小池派である森内さんや田崎さんなども、あなたの星島建設への入社を快く思っていなかった方たちでした。(錦繍)

(30) 名古屋の野戦重砲隊への入隊までには三日しか残されていなかったので、弘前へ帰る余裕も、郷里へ帰る余裕もなかった。(あすなろ物語)

(31) 私に対しては親切にしてくれたが、この記事を読んでからは彼の所で行なわれたパーティへの招待を辞退させてもらった。(若き数学者のアメリカ)

(32) 送りとどけたのが井関忠八郎で、これが縁となり、井関は田沼屋敷への出入りをゆるされ、田沼に市ケ谷の道場を建ててもらった。(剣客商売)

(33) 闇屋ずれのしない一徹者の人のよさで、編集局への出入を大目に見られていた人物であった。(あすなろ物語)

(34) 三冬の両腕を折って、右京との試合をあきらめさせ、永井家への嫁入りを成功にみちびこうとする策を主人にすすめたのは大山用人である。(剣客商売)

(35) さる士族の御曹子だが、街のカフェの女に入れ揚げて、自家への出入りを禁じられているという噂であった。(幻燈畫集)

3.4　状態変化のむすびつき

かざりが新しい状態をさし、かざられが変化を表す動作名詞の場合、状態変化のむすびつきになる。参加のむすびつきではかざり名詞は参加される団体であったが、状態変化のむすびつきでは、社会的地位や身分、新しい状態などを表す点で異なる。以前の段階から次の段階へ移る、という場面での使用が多いため、「～カラ～ヘノ」となるケースも多く見られる。

(36) 吹雪はいささかも衰えようとする気配は見せなかったが、加藤は、夜から朝へ、または昼から夜への移り変りのとき、必ずごく僅かな時間だけ小康現象があることを知っていた。(孤高の人)

(37) カオスからコスモスへの生成を説いた古代人の哲学には深い真理が含まれている。(人生論ノート)

（38）メダルに敗れることで、フライ級からバンタム級への転向に失敗した関は、さらにフェザー級へと転向していった。（一瞬の夏）

（39）アリのブラック・モスレムへの改宗と、その信仰にもとづく徴兵忌避が、タイトルとライセンスの剥奪を強行させることになった。（一瞬の夏）

（40）建築科から農芸科への転科を希望したのは八月はじめであった。（冬の旅）

（41）近代啓蒙主義の倫理における幸福論は幸福のモラルから成功のモラルへの推移を可能にした。（人生論ノート）

（42）君は、君の同期生の中でもっとも将来を嘱望されている。技師への昇格も考えねばならない。（孤高の人）

（43）しばらく考えた末に、私はやはり二十二時間と少しあとに自分が死ぬと仮定した方が筋がとおっているだろうという結論に達した。不死の世界への移行などという風に考えると話が「ドン・ファンの教え」みたいになって、おさまりが悪くなる。（世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド）

3.5　目標のむすびつき

かざりが目標やゴールを表し、かざられがそのための動作を表す名詞の場合、目標のむすびつきとなる。着目すべきは、このくみあわせの場合、連用格で表現することが困難であり、もし連用で表現しようとすれば、「最終ステップへ向けて準備する」「最終ステップのために準備する」などのように、後置詞を用いる必要があることである。連用格は連体格からの移行関係からだけ作られるのではなく、独自の体系をなしていると言える一つの要因である。

（44）「察しはつけているが、明確な答ではない。とにかく彼はあんたに焦点をしぼりこんで研究を進めていた。長い期間にわたって最終ステップへの準備が整えられてきたんだ。あんた自身の知らないうちにね」（世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド）

（45）子貢は、この言葉にも拘わらず孔子の偉大な完成はその先天的な素質の非凡さに依るものだといい、宰予は、いや、後天的な自己完成への努力の方が与って大きいのだと言う。（弟子）

（46）会社設立への計画は順調に進みつつあった。（人民は弱し　官吏は強し）

4．あい手のむすびつき

4節ではあい手のむすびつきについて見ていく。このタイプは、かざりに人名詞、団体、組織をとり、かざられにはそのあい手に対してはたらきかけていく動作名詞をとる。しかし実質的な行動を伴わない名詞も多い。また、はたらきかけ性が強い、直接あい手に接触し、対象の状態変化を起こさせ

るようなむすびつきも実現しにくい。たとえば、「窓への破壊」などのような連語はないだろう。それに対して、「窓への圧迫」「彼への殴打」という、対象との接触にとどまる範囲の連語は、文脈にもよるが可能となるであろう。この種の連語は連用のニ格やヘ格と移行関係にある部分が多い。

4.1節ゆずりあい手とゆずり動作のむすびつきと4.2節申し入れあい手と申しいれ動作のむすびつきは、連用では三項動詞であるが、連体格のヘノ格で表される場合はその三項のうちの二つ、あい手と動作の部分がピックアップされて連語となる。授受される物、あるいは言語活動の内容がピックアップされるタイプの「彼へのプレゼント／彼への手紙」などは本稿で述べたむすびつきと意味的タイプが異なると考えられる。よってかざられ名詞が名詞らしい名詞として扱わねばならない。

かざられがそのあい手に対して何らかの動作を行うものが4.1、4.2、4.3節、4.4、4.5節ではよりはたらきかけ性の低いかかわり、関係的なむすびつきを作る。

4.1　ゆずりあい手とゆずり動作のむすびつき

かざりがゆずりあい手でかざられがゆずり動作を表す場合、このくみあわせになる。ゆずりあい手は、「家」「朝廷」「僧」などのような人名詞、団体、組織などがくる。かざられには「送金」「献金」「布施」などのゆずり動作がくる。ただ、「送金」「献金」のように、単に「送る」だけではなく、単語の中に、「金を送る」という目的語が含まれている場合がある。

(47) しかし、伸子としては、もう〈偉い人〉になるのはごめんだった。もっとも、給料という点から考えれば、真鍋や大畑の申し出を受けた方がいいのは当然だ。家への送金もふやせる。――それで、伸子は、決心をつけかねているのである。(女社長に乾杯！)

(48) その、実利を期待せぬ無駄、というのが、たとえば朝廷への献金である、と信秀がいい、そういう種類のことをやらぬ斎藤道三は、しょせんは美濃一国のぬしだ、とみているのである。(国盗り物語)

(49) 修法などさせられると聞いて、夕霧は僧への布施などもこまごまと気をつけてさし上げる。(新源氏物語)

(50) ドイツ学界への寄付のような、名目の立つ意義のあることならいいのだが……。(人民は弱し官吏は強し)

(51) あたしはまだ十九になったばかりで、それにこんなとこにいるものですから、結婚ってどういうものなのか、さっぱり実感がなくて、なんだか心ぼそくて、それに家への仕送りのこともありますし、いちどお断りしたんですけど、(忍ぶ川)

(52) 幕府への届けは、「急病のため、中屋敷において三日の静養をする」と、いうものであった。(剣客商売)

4.2　申しいれあい手と申しいれ動作のむすびつき

かざりが申しいれの相手をさし、かざられが申し入れ動作を表す場合、申しいれあい手と申しいれ動作のむすびつきとなる。申しいれのあい手には、「玉鬘」「宮」「母」など主に人名詞が来るが、「ドライバー」「一般国民」など人の集合体、あるいは、「テレビ局」などの組織などもくる。かざられには「求婚」「返事」「報告」など、申しいれを表す名詞がくる。

(53) 大将は、柏木をいつも呼びつけて、玉鬘への求婚を熱心に申し入れていた。(新源氏物語)
(54) 臥したまま、休み休み、宮への返事を書いた。文章もとぎれがちに、字もおぼつかなく、「身は煙となって空へ昇っても、心はあなたのそばを離れはしないでしょう。私が死んだら、夕暮れにはとりわけ、空を眺めて下さい。(新源氏物語)
(55) これは一つには、ナオミが国の方の思わくを心配している様子でしたから、彼女に安心を与えるためと、私としても公明正大に事件を運びたかったので、出来るだけ母への報告を急いだ訳でした。(痴人の愛)
(56) 三原は返事をぼかした。苦しかった。安田への弁解はあとでするつもりだった。(点と線)
(57) 長谷川は山本への申し継ぎをすませると間もなく、ハバナ見物をしてから日本へ帰ることになったが、長谷川の発つ時、山本は、(山本五十六)
(58) 一般国民への大本営発表は、翌五月二十一日、「武蔵」東京湾入港当日の午後に行われた。(山本五十六)
(59) SKDの踊り手たちは、最初に自分の名前を名乗り、それから何かパーソナルなお喋りをして、最後をドライバーへの呼びかけでしめくくるという約束だった。(風に吹かれて)
(60) 中央の為政者はもう敵と話をつけて、一般への公表が明日の正午だと云うのだろう。(黒い雨)
(61) テレビ局への交渉は金子に委ね、準備はほぼ整った。(一瞬の夏)
(62) ここ数日に折重なった軍医学校の形ばかりの試験、卒業式、茶話会、荷造り、母校の医局への挨拶、退校式、そして出発。(楡家の人びと)

なお、(63) に見られるような「男への返事」の場合、「返事」が、返事をする動作なのか、なされた返事そのものをさすのかが曖昧になる場合がある。なされた返事そのものをさす場合、これはかざられが名詞らしい名詞の場合に扱うべきものである。これらの違いは文脈によって判断できることも多いが、どちらに属するか曖昧な場合も見られる。

この要因としては、かざられの「返事、仕送り」といった名詞は、返事や仕送りといった動作を表す場合もあれば、返事や仕送りそのもの（手紙や金品）を表す場合もあるからである。その、名詞の意味の二面性によるものである。

さらに、この現象は申しいれあい手と申しいれ動作のむすびつきだけではなく、4.1節のゆずり

あい手とゆずり動作のむすびつきにも観察される。

(63)「手紙をよこす人には、返事をする人と、しなくてもいい人と、よく見きわめてほしい。男への返事というものにこそ、女の人柄が出るものだよ。(新源氏物語)

4.3　はたらきかけあい手とはたらきかけ動作のむすびつき

かざりがはたらきかけのあい手、かざられがはたらきかけ動作を表す。かざり名詞は組織や団体がくる。かざられにははたらきかけ動作がくる。この種の、直接的にあい手に対してはたらきかけるタイプのむすびつきは、ヘノ格のむすびつきの中では多くは見られない。

(64) この二、三年、帝国憲法、教育勅語等の発布をきっかけにして、これまでの急激な欧化政策の反動と国粋主義的国家思想が勢いをもり返し、基督教への圧迫が再び起り始めていた。(花埋み)

(65) 切歯憤激の敵は、今に決然たる反撃に可転、海に堂々の決戦か、我本土の空襲か、艦隊主力への強襲か、御批判はその上にて御願致度存候。(山本五十六)

(66) 学生を商品としかみず、それを管理し、またそれに対する闘いを抹殺しようとしている大学当局へのたたかい。(二十歳の原点)

(67)「持ってるんだ、みんなには隠してるが、おれ一人になるとふところから出して、刃にぬぐいをかけたりしている、むろんおれへの威しだろうが、あのとしごろがいちばんあぶないんだ、(さぶ)

4.4　かかわり的態度のあい手とかかわり的態度のむすびつき

かざりがあい手でかざられがかかわり的態度である場合、このむすびつきになる。かざり名詞は「姉」「母」「被害者」などであり、かざられ名詞は「反逆」「復讐」「補償」などあい手に関わっていこうとする態度を表す。

(68) 昼間の短い時間に、京子の秘密が畳み込まれていたのである。そして、明子はその姉への反逆の姿勢を取りはじめた……。(砂の上の植物群)

(69) 四・二八闘争のとき、私は何よりも自由を大切にする人間として、現在の政治を動かしている支配階級への反逆としてたたかった。(二十歳の原点)

(70) 太郎は補って考える癖をつけていたが、それは出家した母には、息子がどんな大学に入ろうと、大した問題はない筈だという公式論と共に、藤原の微かな、母への復讐ではないか、と思われる要素も含まれていた。(太郎物語・大学編)

(71) 事件の大規模を知ったアポロはふたたび『おかあさま方へ』と題するメッセージを発表した。そのなかで彼らは率直に事件の経過をのべて手おちをみとめ、被害者への補償を誓うとともに、

今後公表するまでドロップは他社のものを買うようにといった。（巨人と玩具）

(72) 公営の店であるからお客へのサービスなどと言う事にも余り関心が無いし、公務員である店員はあるだけ売ってしまうと後はニェートの一点張りとなる。（風に吹かれて）

(73) 加藤は、その彼の行動が、一種の取りみだしであって、そのように彼を追いこんだのは、彼におさがりを押しつけようとした影村一夫の不信行為に対する怒りと、影村一夫を代表とする人間への抵抗であると考えた。（孤高の人）

かざりは、通常人であるが、このむすびつきに似た例として以下の例が挙げられる。これらは、かざりの「病」「冬山」は、人ではないが、戦うあい手、目標物を表す。「病」のように、あい手から攻撃されるタイプのものもあれば、「冬山」のようにあい手に戦う気はないときもある。

これを５節の対象のむすびつきとしない理由は、５節で取り上げる対象のむすびつきは、心理活動をかざられにさしだすタイプのものだからである。４.４節と同様のタイプのものとして、用例からは収集されなかったが、「近代化への抵抗」などといったように、かざりが現象名詞のものも考えられる。

(74) あるとき、父の手が私のワイシャツのボタンを上から順に、苦労に苦労を重ねた末に全部を外しおえたとき、それが父にのこされた、病への最後の抵抗であり、再起への祈りであったことを深い感動と共に理解した。（恥の譜）

(75) 冬山への挑戦という観念が大きな誤謬だった。（孤高の人）

４.５　関係のあい手のむすびつき

かざりがあい手、かざられが関係を表す場合である。二つのもののあいだの関係について表す。

(76) なにより桃子はわが子のおもだちに、殊に横のほうに突出した大きなその耳に、まぎれもない夫への近似を、いや酷似を認めたのである。（楡家の人びと）

５．心理活動の対象のむすびつき

心理活動の対象のむすびつきは、かざられに思考活動、心理、態度を、かざりにその対象をとるものである。かざりである対象は、人の場合も物の場合もコトの場合もある。かざられは、認識、感情、評価、態度などにより６つに分類できる。連用格で表現するならばヲ格やニ格をとることが多いが、ヘノ格はヲ格の領域までを含むという意味で、ヘノ格がカバーしている領域は広い。

5.1　認識の対象のむすびつき

かざりが認識の対象、かざられが認識活動を表す名詞の場合、このむすびつきになる。かざり名詞は「信長」「日本」のように認識の対象をさし、かざられ名詞は「認識」「理解」など、認識に関するものがくる。

(77) 光秀は、不快ながらも信長への認識をすこしずつあらためざるを得なかった。(国盗り物語)
(78) この「ジャパン・アンド・アメリカ」という小新聞は、日本の記事をのせ、在留邦人には故国のニュースを知らせ、米人には日本への理解を高めさせるのが目的だった。(人民は弱し　官吏は強し)

5.2　感情の対象のむすびつき

この節では、かざりが感情の対象、かざられが感情であるものを見ていく。かざりとかざられのタイプによって、ここをさらに三つに下位分類する。

5.2.1　感情的態度の対象のむすびつき

かざりが感情的態度の対象、かざられが感情となるとこのむすびつきになる。この場合の感情は、プラスの感情もマイナスの感情もどちらでもないものも存在する。かざり名詞は人であることが多いが、そうでない場合も見られる。

(79) なるほど彼女には、長いことそれ一つに念じていた男の子、歳のちがう夫への嫌厭を裏返して身体の震えるほどいとしくてたまらぬ聡がいる。(楡家の人びと)
(80) 沖や山脇幸子にも見られた「彼」への畏怖の感情が憎しみの爆発を辛うじて抑圧していたため、その屈辱感はさらに深かった。(エディプスの恋人)
(81) だが、掃除をし、洗濯をしている間にも「彼」への思慕はますますつのるばかりだった。(エディプスの恋人)
(82) ヨーロッパは、この「キリスト教徒の敵」の死を、たいまつを焚き花火を打ちあげて祝い、教会は、神への感謝を捧げる人々で埋まった。(コンスタンティノープルの陥落)
(83) あんなにまでしなくても、と思いはしたが、彼女の一部には「彼」を護るために平気でどんなことでもする「意志」への共感もあった。(エディプスの恋人)
(84) 以前「彼」の周囲でそれに似た現象が起ったからこそ、それを目撃したからこそ、バットの若者があれほど「彼」へのおびえをあからさまに示したのではなかったか。(エディプスの恋人)
(85) ひと通りの回想を終えた郵便局員の中では「彼」への恨みがいつの間にか七瀬への攻撃衝動に変化していた。(エディプスの恋人)

（86）母の死はやがて訪れると知りながら呑気に構えていた。それは母への一種の甘えでもあった。（花埋み）

（87）三日前に感じた彼の体への驚きが、再び甦ってきた。悪くない。それをエディに確かめたくて、なかなかいいですねと話しかけた。（一瞬の夏）

（88）私は男への反感がむらむらと燃えた。（放浪記）

（89）南の海辺ですごすとき、栄二はひっきりなしに独り言を云う、その大半はさぶとおすえのことであり、自分をなだめようとする役人たちへの嘲笑であった。（さぶ）

かざり名詞が「試験」「スパイ嫌疑」など、コト的になると、かざりはかざられの原因・状況的意味合いを持つようになる。かざられが心理活動という面では、次の5.2.2と同じであるが、ここでの心理活動は原因的で、かざりのせいでかざられのような感情が引き起こされる、あるいはかざりがかざられのような感情が起きた原因、引き金となる。（90）でいうならば、「焦りを感じる要因が試験である」という意味合いになる。そういう意味でここでのかざられは受け身的であるが、5.2.2ではむしろ積極的に判断を行っている。

（90）試験への焦りも、明日の生活への不安もなかった。（花埋み）

（91）背後には、抜刀したイエニチェリ軍団の兵士が待ちうけている。マホメッド二世は、敵への恐怖よりも味方に恐怖をいだくことで戦力をたかめるやり方を、同じ血の流れるトルコ兵に対しても使った。（コンスタンティノープルの陥落）

（92）機はべつに炎上もせず大破もせず、峻一がスパイ嫌疑への恐怖も忘れて駈けつけてみると、怪我もしないらしかったテストパイロットが、折れかかった電信柱を辷りおりてくるところだった。（楡家の人びと）

（93）ところで呆然としたこんな時の空想は、まず第一に、ゴヤの描いたマヤ夫人の乳色の胸の肉、頬の肉、肩の肉、酸っぱいような、美麗なものへ、豪華なものへの反感が、ぐんぐん血の塊のように押し上げて来て、私の胃のふは旅愁にくれてしまった。いったい私はどうすれば生きてゆけるのだ。（放浪記）

（94）それはようやくドイツ国内にみなぎる彼の学説への憎悪の衰退を告げる現象かと思わせたが、ヒットラーの擡頭はふたたびこの老人の晩年をおびやかした。（楡家の人びと）

（95）惰性のような芸妓遊びへの悔恨が、ふたたび戦場におもむくまえに、なにかしら無垢の少女の像を彼に求めさしたのである。（楡家の人びと）

（96）やくざなりの観察力で二人がまだ肉体関係にはないと知り、美や知性やその他さまざまな二人をとり巻く雰囲気への嫉妬から、二人の心に深い傷を負わせようとたくらんでいた。（エディプスの恋人）

(97) 女のつげ口は、哲子の裕福な暮しぶりと、若い男に礼讃されていることへの嫉妬からだろうけれど、祖母は、そのまま輪をかけて、逸郎にこれをつげた。(プアボーイ)

さらに、次はかざられ名詞「いたわり」「思いやり」が、上記の感情と少しずれる例である。上記のかざられは単純に感情を表していたが、「いたわり」「思いやり」は、感情ではあるが、それらを実現させるためには行動を伴わなければならないという点で、これまでのものと異なる。

かざられが態度的な名詞であるということから4.3、4.4との類似性もあるが、4.3や4.4ではかざられのはたらきかけ性が強いのに対し、このタイプの連語では感情面が前面に出ている点が異なる。

(98) 一人で身仕度をしたのは、つかれている里子へのいたわりだったかもしれない、そんな風に思った。(雁の寺)

(99) しかし信夫は、かえってその一言一言に、妹ふじ子への思いやりが溢れているような気がした。(塩狩峠)

5.2.2　評価的態度の対象のむすびつき

かざりが評価的態度の対象、かざられが評価活動を表す名詞である。かざりは「息子」「吟子」などの人名詞がくることもあるが、「社会制度」「阿片を購入したこと」などのコトがくることもある。かざられには「非難」「賞讃」などの評価を表す名詞がくる。

(100) 何も言わないことが、息子への非難を意味していた。(青春の蹉跌)

(101) 吟子が内務省の免許を得たと伝えられると吟子への賞讃の記事とは別に、「女は果して医者に向くか否か」という問題がたちまち新聞紙上で論議された。(花埋み)

(102) 続いて日本人の耶蘇教徒が演壇に立ち教義の説明とその偉大さを語るが、それは現在の日本の社会制度への痛烈な批判ともなっていた。(花埋み)

(103) 年間の制限数量を越えて星が原料阿片を購入したことへの批難を反証する、内務省衛生局長からの文書。(人民は弱し　官吏は強し)

(104) 一方では、そんなことがあるわけはない、そんなことを思うのは珠子のやさしさへの冒涜だ、などとけんめいに否定したのですが、(エディプスの恋人)

5.2.3　期待・欲求の対象のむすびつき

かざりが期待・欲求の対象で、かざられが期待や欲求を表す状態性名詞の場合である。期待や欲求の対象となるかざられ名詞は「期待」「渇望」など、他に対するはたらきかけ性が弱く、自己の中で

の感情、感覚的な名詞である。しかし、それらが、対象に対するはたらきかけ性を表す「ヘノ」格とむすびつくところは興味深い。

5.2.1、5.2.2の感情は、すでに終わった出来事に対する感情、評価であったが、このタイプはこれから先の将来に対する展望を表す心理状態となる。

（105）和倉ほどの男でも、その場逃れの言葉を使ったのかと思うと何ともいえなく侘しかった。和倉への期待を裏切られたような淋しさと共に、祈りがきかれなかったというむなしさがあった。（塩狩峠）

（106）その媾曳きの間隔を二倍に延ばし四倍に延ばし、やがて十倍に延ばしてしまえば、その時間の長さだけ二人の関係はうすれ、それと共に女の愛も男への期待もうすれて行って、つまりは元の他人に還元してしまうに違いない。（青春の蹉跌）

（107）邯鄲の都は、天下一の名人となって戻って来た紀昌を迎えて、やがて眼前に示されるに違いないその妙技への期待に湧返った。（名人伝）

（108）源氏が、御息所に熱心に求愛したのは、いまになって考えると、みたされぬ藤壺の宮への渇望が、意識下にあったからに違いないが、なみなみの女人に見られぬ、ふかい心の奥行きに魅せられたためだった。（新源氏物語）

（109）本社で企画中の新製品について知らせたり、本社への要望を聞いたりした。（人民は弱し　官吏は強し）

（110）（それが、この婚姻でおさまる。やすいものだ）とおもうし、かつ将来への希望もあった。（国盗り物語）

（111）これまでの江藤の命を支えて来たものは、明日への希望、未来への期待であった。（青春の蹉跌）

5.3　活動へのかかわり的態度の対象のむすびつき

かざりが活動へのかかわり的態度の対象をさしだし、かざられが態度を表す。かざりが、「作戦」「仕事」などに見られるような活動を表し、かざられが「協力」「献身」などの、それに対する態度を表す。「冬山」は、それ自体は活動とは言いにくいものであるが、「冬山に登る」ということの言った表現だと考えればこのむすびつきとして考えられるだろう。

（112）「大和」の司令長官公室は、従来の戦艦の型を破って、艦の中央部艦首寄りに設けられていた。黒島先任参謀と宇垣参謀長に大体のことを話したあと、中央部の長官室に案内されて、彼は山本に会い、「陣地を持ちこたえている将兵は、ガンジー以下に痩せ細りました」と、補給船団護送の問題で、陸軍のガ島奪回作戦への海軍の協力を要請した。（山本五十六）

（113）人づき合いがよくなったということはいいことではあるが、加藤の変貌が、あの傲慢にも見えるほどの技術における自信と仕事への献身を滅殺するものだったら困ると思った。（孤高の人）

6．原因的なむすびつき

ヘノ格の名詞と名詞とのむすびつきの中では特異であるが、かざりがかざられの原因となっている場合が見られる。「誤報のせいで抗議をした」「式部卿宮が冷たかったから報復した」という意味合いになる。

（114）星の乗った車は刑務所のある市ケ谷方面にはむかわず、問題の報知新聞社の前にとまった。誤報への抗議をし、責任者となぐりあいをするのではないかと、ひとさわぎを期待した記者もあったかもしれない。しかし、そうではなかった。（人民は弱し　官吏は強し）

（115）それはたぶん、源氏の逆境時代、式部卿の宮が冷たかったことへの報復であろう、と宮はあきらめていられる。（新源氏物語）

7．まとめ

これまで見てきたことをまとめると、以下の表のようになる。いちばん左の欄はむすびつきのタイプ、真ん中の欄は用例、いちばん右の欄はかざりとかざられの名詞のカテゴリカルな意味である。分類を細分化し、かざりとかざられの厳密なカテゴリー化ができた。

ヘノ格の名詞と名詞とのくみあわせは、大きく三つのタイプに分類される。方向性のむすびつき、あい手のむすびつき、心理活動の対象のむすびつきである。ヘノ格に共通するのが、かざりが、ある意味での方向を表しているということである。また、かざられが、直接的に対象に向かって働きかけて対象に状態変化を加えるというものではなく、変化や状態、態度を表すということである。

方向性のむすびつきは、 かざりが具体的場所や変化後の状態、到達点などの場所や目標を表し、かざられが移動や変化の動作を表す。ゆくさきと移動動作のむすびつきでは、かざりにもっとも具体的な場所名詞がき、かざられは移動動作を表す。それが、かざられが他動的動作になった場合、うつしかえ場所とうつしかえ動作のむすびつきとなる。かざりが参加される団体や組織、かざられが参加動作となった場合、参加先と参加動作のむすびつきとなる。このむすびつきになると実際の移動は伴わなくなるものも出てくる。かざりが新しい状態、かざられが変化動作の場合、状態変化のむすびつきを作る。参加のむすびつきではかざり名詞は参加される団体であったが、状態変化のむすびつきでは社会的地位や身分、新しい状態となる。かざりの抽象化が進み、かざりが目標、かざられが目標実

現のための動作となる場合、目標のむすびつきを作る。これは連用では表現できないタイプのむすびつきである。

あい手のむすびつきは、 かざりに人名詞、団体、組織をとり、かざられにはそのあい手に対してはたらきかけていく動作をとる。かざりが人名詞、かざられがゆずり動作を表す場合、ゆずりあい手とゆずり動作のむすびつきとなる。かざられが申しいれ動作となった場合、申しいれあい手と申しいれ動作のむすびつきとなる。この二つのむすびつきは、連用で表現すると三項動詞であり、その三項のうちのあい手と動作の部分をピックアップしてできた連語である。かざられがはたらきかけ動作となった場合、はたらきかけあい手とはたらきかけ動作のむすびつきを作る。しかしこの種の直接あい手にはたらきかけるタイプのむすびつきは量的に多くない。かざられがかかわり的態度になる場合、かかわり的態度のあい手とかかわり的態度のむすびつきとなる。かざられが感情を含んだ態度であることで、５節の心理活動の対象のむすびつきと似た面があるが、ここで取り上げたものは態度的要素が前面に出ているものである。かざられが関係を表す場合、関係のあい手のむすびつきとなる。

心理活動の対象のむすびつきは、かざりに対象、かざられに思考活動、心理、態度をとる。かざりは人、物、コトの場合がある。かざられが感情をとるとき、感情的態度の対象のむすびつきとなる。この時の感情はプラス、マイナス、どちらでもないものがある。さらにこのタイプでは、かざり名詞がコト的になるとかざりはかざられの原因的な意味合いを持つようになる。かざられが対象への積極的な判断・評価を行う名詞になると、評価的態度の対象のむすびつきとなる。かざられが、これから先の将来に対する展望を表す心理状態となった場合、期待・欲求の対象のむすびつきとなる。今回用例に見られなかったが、不安や懸念といったマイナスの展望は、この期待・欲求の対象のむすびつきのすぐ隣りにある結びつきであろう。かざられが態度を表す場合、活動へのかかわり的態度の対象の結びつきを作る。

さらにヘノ格には原因的なむすびつきが存在する。原因的なむすびつきはかざりがかざられの原因となっているタイプのものであるが、連用のヘ格からはすぐに考えつかないものである。

このように複合連体格のヘノ格とヘノ格とのくみあわせについて見てきたが、本研究の目標は、単語の語彙的な意味は異なっても、単語のカテゴリカルな意味からむすびつきの性格を一般化して体系を捉えようとするところにある。従って一つずつの単語の語彙的な意味による分類ではなく、今後新しい例が出てきたときにも、どこかに位置づけられる、あるいは、どこかのタイプからの派生関係で説明できる仕組みである。

	用例	かざり／かざられ
3方向性		
3.1ゆくさきと移動動作	キオス島への脱出	具体的場所名詞／移動動作
3.2うつしかえ場所とうつしかえ動作	保税倉庫への搬入	具体的場所名詞／他動的動作
3.3参加先と参加動作	欧州への参戦／連盟への加入	場所名詞・参加される団体／参加動作
3.4状態変化	昼から夜への移り変り	新しい状態／変化を表す動作
3.5目標	最終ステップへの準備	目標・ゴール／達成のための活動
4あい手		
4.1ゆずりあい手とゆずり動作	家への送金	ゆずりあい手／ゆずり動作
4.2申しいれあい手と申しいれ動作	玉鬘への求婚	申しいれあい手／申しいれ動作
4.3はたらきかけあい手とはたらきかけ動作	基督教への圧迫	はたらきかけあい手／はたらきかけ動作
4.4かかわり的態度のあい手とかかわり的態度	姉への反逆	かかわり的態度のあい手／かかわり的態度
4.5関係のあい手	夫への近似	あい手／関係
5心理活動の対象		
5.1認識の対象	信長への認識	認識の対象／認識を表す状態
5.2感情の対象		
5.2.1感情的態度の対象	夫への嫌厭／試験への焦り	感情的態度の対象／感情を表す状態
5.2.2評価的態度の対象	社会制度への批判	評価的態度の対象／評価を表す状態
5.2.3期待・欲求の対象	和倉への期待	期待・欲求の対象／期待・欲求を表す状態
5.3活動のかかわり的態度	冬山への挑戦	かかわり的態度の対象／態度
6原因的	誤報への抗議	原因／結果

参考文献

奥田靖雄（1983）「に格の名詞と動詞のくみあわせ」『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房

奥田靖雄（1983）「を格の名詞と動詞のくみあわせ」『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房

彭広陸（1998）「ヘノ格の名詞と名詞とのくみあわせ」『日本学研究論』

彭広陸（1999）「複合連体格の名詞を≪かざり≫にする連語」『ことばの科学9』むぎ書房

渡辺友左（1983）「へ格の名詞と動詞のくみあわせ」『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房

使用資料

CD-ROM版『新潮文庫の100冊』

女社長に乾杯！（赤川次郎）、山本五十六（阿川弘之）、羅生門·鼻（芥川龍之介）、砂の女（安部公房）、小さき者へ・生れ出づる悩み（有島武郎）、華岡青洲の妻（有吉佐和子）、剣客商売（池波正太郎）、焼跡のイエス・処女懐胎（石川淳）、一握の砂・悲しき玩具（石川啄木）、青春の蹉跌（石川達三）、歌行燈・高野聖（泉鏡花）、風に吹かれて（五木寛之）、野菊の墓（伊藤左千夫）、ブンとフン（井上ひさし）、あすなろ物語（井上靖）、黒い雨（井伏鱒二）、沈黙（遠藤周作）、死者の奢り・飼育（大江健三郎）、野火（大岡昇平）、パニック・裸の王様（開高健）、檸檬（梶井基次郎）、雪国（川端康成）、楡家の人びと（北杜夫）、聖少女（倉橋由美子）、モオツァルト・無常という事（小林秀雄）、一瞬の

夏（沢木耕太郎）、新橋烏森口青春篇（椎名誠）、コンスタンティノープルの陥落（塩野七生）、小僧の神様･城の崎にて（志賀直哉）、国盗り物語（司馬遼太郎）、破戒（島崎藤村）、太郎物語（曾野綾子）、二十歳の原点（高野悦子）、ビルマの竪琴（竹山道雄）、人間失格（太宰治）、冬の旅（立原正秋）、新源氏物語（田辺聖子）、痴人の愛（谷崎潤一郎）、エディプスの恋人（筒井康隆）、二十四の瞳（壺井栄）、李陵･山月記（中島敦）、こころ（夏目漱石）、孤高の人（新田次郎）、アメリカひじき･火垂るの墓（野坂昭如）、放浪記（林芙美子）、にごりえ・たけくらべ（樋口一葉）、草の花（福永武彦）、若き数学者のアメリカ（藤原正彦）、人民は弱し官吏は強し（星新一）、風立ちぬ･美しい村（堀辰雄）、点と線（松本清張）、塩狩峠（三浦綾子）、忍ぶ川（三浦哲郎）、人生論ノート（三木清）、金閣寺（三島由紀夫）、雁の寺・越前竹人形（水上勉）、銀河鉄道の夜（宮沢賢治）、錦繍（宮本輝）、友情（武者小路実篤）、世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド（村上春樹）、山椒大夫・高瀬舟（森鴎外）、遠野物語（柳田国男）、さぶ（山本周五郎）、路傍の石（山本有三）、戦艦武蔵（吉村昭）、砂の上の植物群（吉行淳之介）、花埋み（渡辺淳一）